島根県における近世漁業・漁村史研究の課題と方法

伊藤康宏

はじめに

近年、関東地域を中心に近世漁業・漁村史の個別研究の蓄積がみられる。そのようななかで筆者は、中・近世移行期から近代までの能登内浦地域の定置漁村とその漁業秩序を主として研究対象とした『地域漁業史の研究』（農山漁村文化協会）を一九九二年八月に出版した。拙著の特徴を一口にまとめると、とくに従来から等閑視されてきた漁業・漁村秩序形成のメカニズムを解明した点と漁業資源を含めた地域資源の利用と管理システムを歴史的に解明したものである。前者は日本の近世的漁業・漁村秩序の成立に関して高と役の二元的支配原理と非石高制の一元的支配原理の二つの基軸から把握し、総括を試みたものである。一方、後者は、能登内浦地域における中世末期から近代までの約三五〇年間のモノグラフ、すなわち、近世的漁業・漁村の成立、発展、変貌、再編の過程を地域史の視点から考察したものである(1)。そして、巻末には近世漁業・漁村史研究の手引きとして「近世漁業・漁村史文献目録（一九六二年～一九九一年）」を掲載した。

本研究は同文献目録を作成する過程で生じてきた問題意識、すなわち、島根県関係の漁業・漁村史研究の現状（研究蓄積の少なさ）から発したものである(2)。本稿は、今後取り組むべき近世の島根県漁業・漁村史研究の課題と方法についてまとめたものである(3)。また、同研究の現状を総括すべく県史・市町村史誌や地域史誌研究の文献解題を合せて掲載した。これは、筆者の今後の研究の指針であると同時に漁業・漁村史研究に関心を持たれる方の研究の手引きとして広く活用されることを期待して作成したものである。

一　近世漁業・漁村史研究の課題

『地方史研究』第一五九号（一九七九年）は、「地方史の研究―初心者のために―」といった特集号を組んでいる。そのなかで近世漁業・漁村史研究の先達であった荒居英次が漁業・漁村を担当し、「漁業漁村史研究の課題」といったタイトルで同研究の手引きを簡潔に

解説している。ここでは荒居の研究視座を要約することで同研究の課題にかえるが、荒居はつぎの五点をあげている。

①漁業発展の具体相の追究―地方漁業相互の技術伝播や出漁交渉それに市場条件と関わらせた各地方漁業の具体的な発展を跡付けること。

②幕藩領主の浦方支配・漁政についての検討―各幕藩領主体制下の貢租徴収の体制と漁場をふくめた漁業・漁場の支配（漁政）のあり方を検討すること。

③漁業権（形成・展開・変質）を地方に即しての検討―村落内・地域内・藩内の漁場利用のあり方（全体的な漁場利用関係とその変遷）、各階層の漁民の漁場利用へのかかわりを追究すること。

④漁獲物の流通過程の問題解明―都市市場、魚問屋資本との関係（食料・魚肥・中国向俵物の三市場）から各地域の漁業・漁村の展開を追究すること。

⑤漁村の構造（生産関係面）の考察―村民を漁業生産関係、村落構造のなかで位置づけ、そして漁家、漁村における農業の役割を検討すること。

これらに付け加えて議論の出発点としてとくに成立期の漁村の特徴を解明することや、②の視点の補足で浦方の特徴（町方と比較して）も解明する必要があること、それに⑤の視点に農業を含めた諸生業の役割を問うことであろう。

二　島根県近世漁業・漁村史研究の現状

島根県の近世漁業・漁村史研究についても全体として以上の荒居の指摘は当然、留意されるべき点である。これらの視点から今までの島根県近世漁業・漁村史研究の成果をみてみよう。

まず、全国的レベルで高い研究水準・蓄積のある分野として田中豊治や荒居英次の一連の隠岐の俵物（生産と集荷）の研究などがあげられる（後掲の文献解題参照、以下同様）。これらは④の漁獲物の流通過程の問題解明（一部、①の漁業発展の具体相の追究や②の幕府浦方支配・漁政についての検討も行なっている）といった視点での最大の成果といえる。しかし、③の近世的漁業権（採貝藻漁業やその他の漁業）の特質や⑤の漁村の構造（成立・変貌過程）の解明といった点が不明のままで、これらの点がとくに残された課題といえる。

山岡栄市『漁村社会学の研究』は、古浦、和木浦、江角浦、大浦、隠岐島の加茂、大久、崎などの村落構造、社会構造などについての研究である。これらは主として⑤の漁村の構造分析といった視点から断片的に論じられたものであり、①漁業発展の具体相の追究、②幕藩領主の浦方支配、漁政についての検討、③浦方に即しての漁業権（形成・展開・変質）の検討、④漁獲物の流通過程の問題解明、などが残された課題である。また、⑤の漁村の構造（成立・変貌過程）についてはとくに枝郷大浦と親郷母村磯竹村の関係の解明といった視点を含めた見直しが今後の課題となろう。

また、二野瓶徳夫『漁業構造の史的展開』は、島根県庁所蔵の明

治初年の漁場場区史料の検討から幕末・維新期の島根県の漁場利用関係を「総百姓共有漁場・村中入会漁場」と総論的に位置付けている。これは③の幕末期の近世的漁業権の特徴を検討したものであるが、幕末期（変貌過程）に限っても漁村構造を示している在地の浦方史料からこの点を検討し、漁場利用関係の内実を明らかにするといった課題が残されている。この他大橋川漁場おける白潟・末次両町漁師と松江藩舟手方との対抗関係について概要的に述べているが、①漁業発展の具体相の追究、③漁業権（形成・展開・変質）を浦方に即しての検討、④漁獲物の流通過程の問題解明、⑤漁村の構造（生産関係面）の考察といった点を宍道湖漁業との関連で位置づける必要があろう。

県史や市町村史誌などで注目されるのは、『西郷町誌』、『江津市誌』、『美保関町誌』ぐらいである。そのなかで田中豊治が中心となって編纂した『西郷町誌』上巻は、田中自身の隠岐俵物の研究成果が反映されている点で豊かな内容になっている。『江津市誌』上巻は、内容的には問題の残る箇所も多々あるが、成立期の漁村の特徴（枝郷和木と親郷都野津との関係、和木の独立）や漁村の歴史的社会的意義（漁村の社会的分業の意味）を解明しようとしている研究の視点は大いに評価されよう。また、漁業慣行上の興味深い点も記述されている。それは和木浦での中世的形態が残存した漁場利用慣行と黒松浦の総百姓共有漁場利用慣行の展開である。しかし、両者とも事例紹介の域をでない点が悔やまれる。『美保関町誌』上巻は、浦の成立や地方との比較から浦方を解説している点は大いに評価されるが、幕末期の史料に限定されている点で説得力に欠ける。また、元禄一五年（一六三八）の菅浦と北浦の分村の歴史的意義を問うていない点も残された課題と言えよう。これらの市・町誌を踏まえたうえで今後の個別研究の課題は①～⑤の視点から再検討することである(4)。

三　島根県の近世漁業・漁村史料について

現在、近世、近代とも島根県関係の漁業・漁村史料の調査は充分に進んでいるとはいえない。また、筆者自身も古文書調査を行なえていない段階ではあるが、筆者が既刊の史料目録集、報告書等で確認しえた範囲で近世漁業・漁村史料とその所在を紹介しておく。これによって今後の漁業・漁村史研究を行なうに際してすこしは参考となろう。

島根県立図書館所蔵の古文書（筆写本中心）を『郷土資料目録』（島根県、一九五六年）でみる限り、ほんの数十点にすぎない。このことは島根県の漁業・漁村史研究の現状を写し出しているともいえる。漁業・漁村史料に限らず他の史料についても今後は公文書館の設立によって史料の保管機能を充実させていくか、もしくは公立図書館の史料調査収集と保管機能を充実させるかのどちらかが早急に望まれる。

同資料目録から漁業・漁村史料を参考までに抜き出してみるとつぎのような史料がある（冒頭の数字は目録史料番号）。

二三六「宝暦十年辰四月海草刈ノ儀ニ付水浦片句浦争論ニ及訴書」（旧御津村役場）、二四三「（享和二年）雲州干鮑新規稼取極候受書」

（田儀、河上昌之助）、二四七「文政二年卯極月魚問屋定書」（邇摩磯竹林愛吉）、二六七「（享保二〇年）隠岐国海士郡海士村産物控」（海士村上助九郎）、二六八「（天明五年）長崎御用煎海鼠干鮑御請書写」（海士村上助九郎）、二七六「（明治二四年）御津村漁場慣行調査書」（旧御津村役場）、二八二「手結浦人数書」、六〇四「文政一三寅年七月浦差出明細書上帳」（邇摩大浦湊林愛吉）、六〇五「文政一三寅年七月村差出明細書上帳控」（邇摩磯竹林愛吉）、八一八「（慶安三年）片江村御検地帳」（旧片江村役場）、八一八「（寛文三年）水之浦御検地帳」（旧御津村役場）、八一八「（寛文一二年）大芦村御検地帳」（旧大芦村役場）、八一八「（延宝六年）大芦浦塩浜改帳」（旧大芦村役場）、八一八「（安永三年）野波浦御検地帳」（旧野波村役場）など。また、売布神社所蔵の史料を複写したものに、「松江湖漁場由来記（白潟漁場漁師由来、末次漁師由来）」、「永代略記（白潟漁師仲間）文書」がある。

島根県下全域の古文書の所在を報告している資料に『島根県古文書等所在確認調査報告書』（島根県教育委員会、一九七七～一九七八年）がある。このなかで漁業・漁村関係の古文書はつぎのようなのがある。片句浦区所蔵文書（鹿島町片句浦区役所）―片句の漁業、年貢上納、俵物出来高等に関するもの、古浦公会堂所蔵文書（鹿島町古浦区役所）―漁業・海山調停、塩浜等に関するもの、御津区役所蔵文書（鹿島町御津区役所）―入会山に関する書状、約状、依頼状、請状、漁業に関する訴状等、八束町役場所蔵文書（八束町役場）―検地帳、名寄帳、戸籍、入会山に関するもの、中海漁撈に関するものなど、仁摩町・高橋家文書―漁業勘定帳、仕入勘定帳、江津市所蔵文書（江津市）―黒松村村方文書など、江津市・小川家文書―支配、土地、租税、村、産業関係文書など、小野村役場所蔵文書（益田市）―津和野藩領飯浦と長州藩領江崎との漁業入会に関するもの、益田市・寺戸家文書―土田浦年寄職にともなう文書で漁業関係の文書や触書等、益田市・中須公民館所蔵文書（中須公民館）―漁業、海運、水産業などに関する文書など。各古文書とも目録等はいまだ作成されていないので、史料目録作成と史料の保管体制を早急に検討することが望まれる。

このほか県内ではないが、戦前戦後に日本常民文化研究所（現在、神奈川大学附属研究所）が中心になって収集した島根県関係の筆写史料が水産庁水産資料館と文部省史料館に保管されている。水産資料館には、一、島根県庁文書―島根県漁業場区　明治六年～明治一〇年　写五冊、二、福浦漁業協同組合・那賀郡西湊村字福浦―漁業慣行調査書　明治九年～明治二四年　一綴写、三、唐鐘漁業協同組合・浜田市国府―漁場関係書綴　明暦二年～寛政二年　一綴写、四、美保関町役場文書―明和八年～明治二七年　写一冊、五、桑原赳夫家文書・浜田市津摩―宝暦九年～明治一三年　写二冊、六、売布神社所蔵文書・松江市和多見町―白潟漁師仲間文書　宝永四年～明治四年　写一冊、七、鷦鷯義夫家文書・美保関町―美保関町漁業組合関係文書　明治八年～明治二四年　写三冊、八、谷田重矩家文書・那賀郡国府村国府―写一冊、九、鈴木芳郎家文書・那賀郡三保村古湊―写三冊、十、八束村役場文書・池上但馬家文書・和泉林市郎家文書―写一冊などが所蔵されている（『水産庁水産資料館所蔵資料目録』第一巻～第四巻、一九七五年―七七年）。また、文部省史料館に

は「隠岐国産物絵図注書（美一冊）」、「島根郡本庄町地引網三帳許可願及許可書　文政十年（三通）」、「美保神社諸手船絵図（コロタイプ一枚）」、「石見国和江浦漁師商人商売熟談書　寛政五年（一通）」、「石州邇摩郡温泉津邑木津屋平左衛門船積（一冊）」、「小割鉄荷物仕切銀不払出入一件留（文化八年）、「石見三保三隅浦漁村史料（写一冊）」、「浜田浦大年寄諸事控　明和八年（半一冊）」、「石見国美濃郡小浜浦漁業口銭之儀ニ白上床屋篠原熊五郎（半一冊）」、「内々申上覚　嘉永元年カ」、「日本地誌略図（高津山汐浜）　広重　明治九年（大錦一枚）」（『史料館所蔵史料目録』第八集、祭魚洞文庫旧蔵水産史料目録、一九六〇年）などが所蔵されている。このうち（西石見）三隅漁村史料は膨大な漁村史料であったとの指摘があるが、地元ではあまり知られていない(5)。

いずれにしても史料調査、史料目録作成と史料集の刊行といった一連の作業は未着手の段階なので、地元古文書を読む会や関係教育委員会や公立図書館そして地元漁業協同組合などが中心となってこのような筆写史料を参考にして、同作業を早急に行なう必要がある。そして、そのうえで漁業・漁村の特質（社会的地域的分業の点で）を解明するといった視座を中心に据え、①から⑤の視点にそって漁業・漁村史の個別研究を進めることが望まれる。

四　むすびにかえて

いままでは漁業・漁村史研究の課題についておりにふれて断片的に述べてきたが、ここではそれらについて総括することでむすびにかえる。

1　全県的な漁業制度、近世的漁業権について

二野瓶徳夫『漁業構造の史的展開』は、島根県の行政史料（漁場場区関係史料）を使って幕末・維新期の島根県の漁場利用関係を「総百姓共有漁場・村中入会漁場」と総論的に位置付けているが、この点については在地の浦方史料や行政史料からアプローチし、実証する必要があろう。行政史料としては、農林省水産局編纂『旧藩時代の漁業制度調査資料』（農林省水産局が昭和初年に全国的に旧幕藩時代の漁業制度の沿革を各府県に調査依頼してまとめたもので、島根県は昭和二年に出雲、石見、隠岐の旧幕藩時代の漁業制度を回答している）や各市町村の「漁業慣行調査書」（島根県が明治二四年に各市町村の漁場慣行〈明治八年以前と九年以後〉を調査した史料）がある。現在、筆者が確認できている史料は、飯浦浦〈『益田市誌』下巻八四一～八四三頁所収〉、松原浦〈『三隅町誌』九一六～九二一頁所収〉、馬路村〈『仁摩町誌』五〇九～五一〇頁所収〉、黒松浦〈『江津市誌』一〇七二～一〇七六頁所収〉などが市町誌にそれぞれ収録されており、また、「（明治二四年）旧藩時代隠岐国漁制調査書」（島根県隠岐支庁蔵）、「御津村漁場慣行調査書」（島根県立図書館蔵）、「只浦漁業慣行調査書」、「鰐淵村漁場慣行調査書」（以上、平田市立図書館蔵）、「生湯浦漁業慣行調査書」（浜田市立図書館蔵）、「小野浦漁業慣行調査書」（益田市立図書館蔵）、「福浦漁業慣行調査書」（水産庁水産資料館筆写本蔵）、「美保関漁業慣行調査書」（水産庁水産資料館筆写本蔵）などが現存・保管史料としてある。このほか明治初年

ではあるが島根県総務課所蔵史料のなかに、「漁業場区」史料が残されている。これらの現存の行政史料調査収集・整理したうえで隠岐、石見・出雲地域の全県的な史料集としてまとめ、そのうえで、浦方史料とを付き合せて各浦の漁場利用関係を解明する必要があろう。

2　特定漁村、浦について

山陰漁村社会の研究を精力的に進めてきた山岡栄市は、「漁村の社会経済史的研究」（『漁村社会学の研究』大明堂、一九六五年、第九章所収）で大森銀山領大浦漁村の変遷について漁村構造の変動論的視点から述べている。しかし、同研究で残された課題は、さきに指摘したところであるが、漁村の特徴、とくに漁村の成立・独立といった面についてである。これは邇摩郡の枝郷大浦と親郷磯竹村の関係を解明することである。この点については島根大学附属図書館所蔵の林家文書がその課題を解明する史料となろう。参考までに『石見銀山領地方文書目録・林家ほか』（島根大学附属図書館、一九八一年）のうち浦方史料を抜き出してみると、一～六「宗門帳　石見国邇摩郡磯竹村大浦湊」（安政三年～四年）、十～一四「五人組改帳　邇摩郡大浦湊」（安政二年～七年）、一六～一七「家数人別牛馬増減帳　石見国邇摩郡大浦湊」（安政三年～四年）、一九「宗門人別引越状并受取控　大浦湊　年寄　広右衛門」（天保三年）、二五「石見国邇摩郡磯竹村新田検地帳」（天保五年）、二九六「浦差出明細書上帳　邇摩郡磯竹村之内大浦湊」（文政一三年）、二九七「村差出明細書上帳控　邇摩郡磯竹村」（文政一三寅年）、四九八「魚問屋定書　大浦役人」（文政二年）、四九九「鯨売捌諸入用差引残銭浦方割賦帳　大浦湊年寄広右衛門」（嘉永二年）、五〇〇～五〇一「廻船漁船書上帳　邇摩郡磯竹村　大浦湊」（明治三年、四年）などがある。

枝郷と親郷の関係が近世をとおして固定した村はこのほか那賀郡の枝郷唐鐘と親郷国府村などがある。それとは反対に枝郷が親郷から独立した例として那賀郡の枝郷和木の親郷都野津から村切り・独立（正保三年〈一六四六〉九月）があり、那賀郡の枝郷黒松・枝郷後地の親郷都治本郷からの分村化（慶長七年〈一六〇二〉検地より）、出雲地方では島根郡の北浦と菅浦の元禄一五年（一七〇二）の分村化の例がみられる(6)。

3　漁業と神社について

二野瓶徳夫『漁業構造の史的展開』は、また、大橋川漁場おける白潟・末次両町漁師と松江藩舟手方との対抗関係について概要的に述べているが、この大橋川の漁業権の問題もさることながら売布神社所蔵の「松江湖漁場由来記」、「白潟漁師仲間」などは漁業と神社の関係を問うことができ、漁村社会の特徴を解明するうえでユニークな内容を含んでいるものと思われる。そして、この研究が進めば琵琶湖の漁業と寺社の関係の比較研究が可能となる。なお、この問題を戦前から問うてきた祝宮静『神社漁業史』（神社経済研究所出版、一九三七年）などがこの研究を進めるにあたって参考文献となろう。

島根県の漁業・漁村史研究の蓄積が少ない現段階では右に掲げた課題（テーマ）よりも広く個別・具体的な事例研究の蓄積が望まれるのかもしれない。

註

(1) 詳細は拙著を参照されたい。なお、近世漁業・漁村史研究動向については「序章　近世漁村史研究の動向と方法」でまとめておいた。

(2) 同研究の蓄積の少なさは、森安　章「明治前期の漁場慣行―島根半島沿岸漁村の実態―」(『山陰地域研究〈伝統文化〉』第八号、一九九二年)でもすでに指摘されているとおりである。

(3) 近代についても当初は本稿でふれる予定であったが、紙幅の関係で割愛せざるをえなかった。別稿で考察するが、興味深い全国的にも注目されうる歴史的事実が近代の島根県でみられる。

(4) 美保関町関係の史料は、島根大学附属図書館所蔵の寺本家文書と森脇武夫家所蔵文書などがある。前者は片江浦年寄文書で後者は七類浦庄屋の文書である。なお、寺本家文書には『出雲国片江浦寺本家文書目録』(島根大学附属図書館、一九八一年)があるが、漁業・漁村関係史料を抜き出してみるとつぎのような史料がある。八「島根郡北浦当子秋田方輪切帳」(嘉永五年)、一三から一八「片江菅両浦田畑下作人別算用帳」(文政一三年～天保六年)、一九「片江浦人別(欠)」(文化三年)、二〇～二九「島根郡片江浦人別取遺帳」等(文化四年～天保六年)、二五三「大網干鰯代銭算用帳」(天保三年)、二五四「鰯共ニ安海老漁水揚帳」(天保一一年)、二五五「東組浦々当三月ゟ四月晦日迄鰯取上ケ□并代□□書出し　組頭文十組下」(嘉永五年)、二五六～二六〇「島根郡諸喰浦(菅浦、野井、下宇部尾村、多古浦)在船差出帳」(嘉永五、六年)、二六一～二六三「各浦明細帳」など。

(5) 西垣晴次・福田アジオ・木村礎「(座談会)近世村落の景観から」『歴史公論』九五号(一九八三年)の福田、西垣の発言。

(6) 拙著『前掲書』(一九～二〇頁)で泉州岡田浦の分村(元和四年〈一六一八〉)の問題を取り上げた。そこでは近世漁村の成立要因として①近世初期の戸数の増加、②水主役の指定と水主層の自立、それに③親郷との経済基盤の相違などの三点を指摘した。

〈文献解題〉

島根県全域(隠岐・出雲・石見)

単行本

農林省水産局編纂『旧藩時代の漁業制度調査資料』(農業と水産社、一九三四年、A5版・七八〇頁)三七五―六四二頁所収

十八　島根県　旧藩時代漁制調(松江市・八束郡・能義郡・仁多郡・大原郡・簸川郡・飯石郡・邇摩郡・安濃郡・那賀郡・美濃郡・邑智郡・鹿足郡・隠岐国)、調査項目として第一　漁業免許ニ関スル事項、第二　水族蕃殖保護ニ関スル事項、第三　漁業取締ニ関スル事項、第四　漁業者ノ負担ニ関スル事項、第五　漁場入会専用ニ関スル事項、第六　区画漁場ニ関スル事項、第七　漁場争ノ裁定ニ関スル事項、第八　漁業者保護ニ関スル事項。

『新修島根県史』史料篇2　近世上(島根県、一九六〇年、A5版・

八〇八頁）

57長崎御用俵物請書（天明五）、58隠州俵物新規稼并増方等取極請書（享和元）、59隠州干鮑水練入漁新規取極請書（享和元）、60俵物之問屋船宿請書（享和元）、61平戸白浜浦青崎宇八隠岐出稼干鮑引請書（享和三）、62木原甚三郎渡海取極書付（享和三）、63俵物御用一途留。

『新修島根県史』史料篇3　近世下（島根県、一九六〇年、A5版・六八一頁）

23温泉津湊問屋中定書（文化二）、24大浦湊魚問屋定書（文政二）、6浦方御条目（宝暦九）、16浦方諸事書上帳（慶応二）、23浦運上物覚（慶安三）、24浦役船持共江被下定書（延宝五）、25網役定書付（貞享五）、26魚荷出役覚、27浦役勤向覚、28七浦諸色見合。

『新修島根県史』通史篇1　考古・古代・中世・近世（島根県、一九六八年、A5版・九二六頁）

近世の漁業〈七四六―七五二頁〉（第四部　近世　第三章　藩政の展開　第三節　産業と経済）。

二野瓶徳夫『漁業構造の史的展開』（御茶の水書房、一九六二年、A5版・三二一頁）

松江白潟・末次両町漁師と松江藩舟手方との対抗関係（第一章　江戸時代における漁場占有利用関係の展開構造　第五節　漁場占有利用関係をめぐる領主と漁民との対抗）、島根県の地域的特徴（第三章　明治維新期における漁場制度の再編　第二節　先進地域および一般地域における漁場制度の再編）［第二章　島根県の漁場制度　一　地域的特徴の概観、二　海面官有宣言と海面借区制、三　旧家臣団の漁場出願、四　地先漁場地元主義と町村受「明治維新と漁場制度（II）」『漁業経済研究』第七巻第一号、一九五八年所収］。

山岡栄市『漁村社会学の研究』（大明堂、一九六五年、A5版・四四三頁）

第七章　漁村社会の変貌過程［第一節　砂浜漁村の先進性（外園浦、和木浦）、第二節　漁港漁村の成立発展過程〈江角〉、第三節　漁村社会学の課題（『島根大学論集』社会科学第一号、一九五五年所収）］、第八章　漁村における過剰人口の問題［第一節　漁村の類型、第二節　砂浜漁村の変貌〈外園浦、和木浦〉、第三節　過剰人口の理論と砂浜漁村の運命〈古浦〉（『島根大学論集』人文科学第四号、一九五四年所収）］、第九章　漁村の社会経済史的研究〈大森銀山領大浦漁村の変遷〉［第一節　漁村における支配勢力の推移、第二節　網漁業の発展、第三節　生魚問屋の成立とその変遷、第四節　大浦の社会構造（『島根大学山陰文化研究紀要』第四号、一九六三年所収）］、第十章　隠岐島の村落構造［第一節　村落構造分析の視点、第二節　隠岐島の繁栄と衰退、第三節　加茂および大久の村落構造、第四節　崎の村落構造、第五節　むすび（『史泉』七・八号、一九五七年所収）］、第十一章　隠岐島村落の共同体規制［第一節　共同体規制と隠岐島村落の特質、第二節　牧畑の管理運営をめぐる共同体規制、第三節　共有林の管理をめぐる共同体規制、第四節　沿岸漁業における共同体規制、第五節　日常生活における共同体規制、第六節　共同体規制強化の諸要因と隠岐島の近代化（『社会学評論』五六号、一九六四年所収）］。

隠岐

単行本

永海一正『黒木村誌』（黒木村誌編集委員会、一九六八年、A5版・一六五五頁）

4農間余業／小物成における漁業品目／美田村の漁業／別府村の漁業／宇賀村の漁業／長崎俵物／俵物一手請負方／俵物方役所／島前請負人と美田村世話人／集荷の強化／割賦高／俵物生産の影響（第三章　近世）〔第3　歴史篇〕。

田邑二枝『海士町史』（海士町役場、一九七四年、A5版・九五二頁）

第六節　漁法の発達〈1「あま」漁法、2はいなわ漁法、3越中網の伝来、4大敷網、5かがり火用松の伐採願、6近世の漁場法度〉（第三編　歴史　第三章　近世）。

西郷町誌編さん委員会編『西郷町誌』上巻（西郷町役場、一九七五年、A5版・一一〇三頁）

第九節　近世西郷の産業の発達　第五項　水産業〈一　概要／重要な水産業、二　近世中期の漁業生産／各村の実態／網漁業／商品化、三　近世後期の漁業／漁業慣行調査／漁場、第十節　隠岐における長崎俵物と西郷　第一項　長崎俵物の概念、第二項　隠岐における長崎俵物の生産（第三章　近世）。

崎郷土史研究会『崎部落誌』（崎郷土史研究会、一九七七年、B5版・二八九頁）

7崎と長崎俵物、8漁法の発達（六、近世）。

田中豊治『隠岐―島嶼経済の構造と変貌―』（ぎょうせい、一九七七年、A5版・四四〇頁）

第四項　水産業の近世的展開（第二編　島嶼経済の解体過程　第二章　封建的生産形態の変貌過程）。

田中豊治『隠岐島の歴史地理学的研究』（古今書院、一九七九年、A5版・三一二頁）

第五節　近世隠岐の水産業〈一　小物成の水産物、二　長崎俵物の生産と流通〉（第五章　近世隠岐の歴史地理）。

雑誌論文等

小沢（田中）豊治「隠岐における長崎俵物の生産」（『経済史研究』第二八巻二号、一九四二年）

諸言、一、公儀の方針、二、浜方の状態、三、文化四年の実績、四、問屋への補助、五、あとがき。

津川正幸「隠岐島前における俵物生産」（『史泉』第七・八合併号、一九五七年）

隠岐島前村尾益行（隠岐神社宮司）家文書の俵物史料紹介とその若干の解説。

津川正幸「近世隠岐水産業に関する覚書」（『経済論集』〈関西大学〉第八巻第一号、一九五八年）

隠岐島の漁業生産（一般漁業と俵物生産）の発展過程を史料的に検討（近世漁業生産の一般的発展過程と対比して）。

田中豊治「近世末期における長崎俵物の生産、流通の地域的特色」（『漁業経済研究』第十九巻第三号、一九七二年）

一　従来の研究の批判と今後の研究上の問題点、二　わが国における俵物生産地域、三　俵物流通形態の地域性、四　俵物貿易の推移と鰯の貿易品化、五　俵物生産、流通と近世日本の国民経済展開と

の関係、六　結び。

田中豊治「隠岐における長崎俵物の歴史地理学的研究」（『歴史地理学紀要』第十四巻、一九七二年）

一、諸言、二、隠岐における「長崎俵物」生産前史、三、隠岐における長崎俵物生産と流通（A研究史問題点、B隠岐における長脇俵物生産の全国的位置づけ、C隠岐における長崎俵物生産と流通〈イ、天明五年長崎会所直買実施以前の状況、ロ、天明以降享和期における生産増強政策の進展、ハ、化政期における俵物生産の推移、ニ、近世末期の俵物の送荷について〉、四、結び。

田中豊治「近世末期隠岐島水産物商品化の展開過程と流通形態」（『歴史地理学紀要』第十六巻、一九七四年）

研究目的、一　文政期における隠岐と松江との商品流通の特色（水産物）、二　隠岐と伯耆との商品流通（水産物）、三　遠隔地市場への商品積出（水産物）、四　鰯の対外輸出、五　隠岐における水産物商品化の展開過程とその意義、六　近世後期の本土漁民の隠岐島出漁とその流通問題、むすび（内藤正中編『近代島根の展開過程』名著出版、一九七七年所収）。

荒居英次「隠岐の俵物生産・集荷と役場引請制」（『日本大学人文科学研究所研究紀要』第二一号、一九七八年）

はしがき、一、役場引請制以前の俵物生産、二、俵物役場引請の実態、三、役場引請制下の俵物生産、四、俵物の集荷、むすび（荒居英次先生遺著刊行会『近世海産物経済史の研究』名著出版、一九八八年、A5版・四五七頁所収）

荒居英次「隠岐の俵物生産と幕府派遣海士の入島」（地方史研究協議会編『山陰―地域の歴史的性格』雄山閣、一九七九年所収、A5版・四三五頁）

はしがき、一　幕府潜り海士の入島初計画と島内の動向、二　享和二年における長崎潜り海士の入島と干鮑生産、三　享和三年～文化三年における肥前平戸海士の入島と干鮑生産、四　他国潜り海士出漁の影響と島内浦方の動向、むすび。

石見

単行本

矢富熊一郎『益田町史』上巻（益田公民館、一九五二年、A5版・四八五頁）

六、浦行政機関〈1専福寺地浦番所、2浦奉公、3大年寄、4浦年寄、5大年寄の勤め方と待遇、6諸浦役銀と漁獲高、7地曳網の起源と沖縄使用の禁止、8益田七浦の慣行〉、七、浦境論地〈1浦境、2浦境紛擾の裁定、3中須高津論地、4入会境杭〉（第六期　江戸時代）。

大島幾太郎編著『那賀郡史』（大島韓太郎、一九七〇年、A5版、七九〇頁）七六三―七六六頁

三隅組七浦宝暦九年（一七五九）「浦方諸事書付帳」（鈴木家文書）。

三隅町誌編さん委員会『三隅町誌』（三隅町、一九七一年、A5版・一二一五頁）

第一章　藩政およびその下部機構（第十三節　浦行政）、第二章　藩政時代の産業（第五節　水産業）（第三編　歴史〈近世〉）。

仁摩町誌編さん委員会『仁摩町誌』（仁摩町役場、一九七二年、A5

版・一〇〇八頁）
第三章　封建社会と漁民（第一節　浦行政と浦年貢、第二節　漁業の発展と漁場紛争、第三節　漁村社会と漁民の生活）（第四編　近世）。
江津市誌編さん委員会編『江津市誌』上巻（江津市、一九八二年、A5版・一四一五頁）
第二節　漁村の発展と漁業慣行（一　沿岸漁業の発展と海浜争論〈1　漁業権の成立と漁村の発展、2　漁場と村境争論〉、二　近世の漁村と漁業慣行〈1　和木浦の漁業慣行、2　黒松浦の漁業慣行〉）（第五章　むらの生業と生活）。
雑誌論文等
三島志津子「近世における石見の漁村―那賀郡国府村字唐鐘浦を中心として―」（『史論』第七号、一九五九年）
漁業権の総有性、漁業権の領主と漁民の対抗関係、漁民の階層性などについて幕末期の浜田藩の唐鐘浦の事例を通して断片的に紹介。
岡崎三郎「浜田藩東浦の宝暦六年『浦々請』願上げについて」（『郷土石見』第一号、一九七六年）
一、浦諸役銀について、二、請所松原忠右衛門のことども、三、浦々施行の意味するもの（格差について、他国商人の往来、浦々の生活上の問題）。
児島俊平「山陰における漁船の渡来ルートについて」（『郷土石見』第七号、一九七六年）
一、「タタラ」との関係、二、隠岐で生れた舟、三、石見と出雲の断層。
児島俊平「龍神さんと石見漁民―文化年代の異常海象について―」（『郷土石見』第一一号、一九八〇年）
龍神さんの梁札、海の妖怪、アシカと漁業、異常気象と海象
桑原韶一「浜田藩における俵物請負について―津摩浦の場合」（『亀山』第九号、一九八二年）
一、はじめに、二、幕府の長崎俵物政策について、三、山陰諸国の俵物請負について、四、浜田藩の俵物について、五、幕府の俵物取調役人の巡検について。
山藤　忠「（文政一二丑）銀山付御料浦方運上覚」（『郷土石見』第一三号、一九八四年）
文政一二年（一八二九）の大森銀山領下の諸浦の運上書上帳（著者所蔵）―干魚役、浦方品々請役（海草役、魚船役、生魚問屋役、鰯網役、中引鯛網役、鰤網役、わかな懸網役、しいら網役、四ツ張網役、川網役、簗役、塩浜役、湖水引網役・湖水口縄役、湖水魚取役）沖立魚船運上、磯釣船運上、若布刈船運上、諸浦大敷網役、諸浦鰯網役、諸浦上前（塩焼）役、干鰯塩相物問屋運上役、漁猟運上。
桑原韶一「浦方にみえる喪服の事例について」（『亀山』第一六号、一九八九年）
一、はじめに、二、藩主の逝去の場合、三、若殿様逝去の場合、四、御隠居（藩主後室）。
大庭良美「枕瀬村日原村川漁出入一件（一）～（四）」（『郷土石見』第二二号～第二五号、一九八九年～九〇年）
日原村の者津和野藩の留川を犯す／津和野藩・御用番に吟味願を出す／関係者呼出し、ぞくぞく江戸へ／日原村から呼び出された人び

と／津和野藩から評定所へでる人びと／三奉行列座、吟味はじまる／日原村の者、山川入会を主張〈同（一）―発端から第一回吟味まで―〉、津和野藩、山川入会を否定／川入会―枕瀬の土地三尺通りは日原村／以前の川敷／日原村が入会と申す高鉢山／日原村の訴状―交易差留め〈同（二）―第二回吟味より第四回吟味まで〉、木口村の荒所は日原村の飛地／津和野藩へ勘弁（示談）を勧告／枕瀬村元庄屋児玉彦市死亡／津和野藩の回答／工事吟味は証拠次第道理次第／評定所地改めの者派遣を決定〈同（三）―第四回吟味より第六回吟味まで―〉、津和野藩日原村の主張を論破／現地調査／吟味再開／藤左衛門呵られる／医師親類縁者の出入差留は不隠当／結末／これに費やした費用〈同（四）―第七回吟味から終結まで―〉。

（桑原韶一）「漕鯨にみる漁村の一段面」

一、はじめに、二、津摩浦における鯨に関する記録、三、藩法、四、文化一三年一月の漕鯨一件文書から、五、諸経費その他（漕鯨之節諸入目并勘定覚帳）（謄写版・発行年不祥、浜田市立図書館所蔵）「乍恐以書付奉願上候」（和江浦沖捕鯨騒動・年代不祥、謄写版・発行年不祥、浜田市立図書館所蔵）。

出雲

単行本

山陰日日新聞島根支社編『松江八百八町内物語　白鴻の巻』（山陰日日新聞社、一九五五年、A5版・三五〇頁）

売布神社（一、松江村の氏神、二、社頭屋敷帳のこと、四、青戸社司家のこと）、（十、大橋川の漁士たち／社頭漁師／、十一、松江の漁法）。

山陰日日新聞島根支社編『松江八百八町内物語第二巻　末次の巻』（山陰日日新聞社、一九五六年、A5版・三五四頁）

十、末次猟師町由来記、御船屋（一、松江藩御手船手組、四、歴代御船屋奉行のこと）

平田市誌編さん委員会編『平田市誌』（平田市長、一九六九年、A5版・一〇七三頁）

二　漁業の変遷〈漁獲物の種類、十六島海苔と若布、網漁業と釣漁業、漁業制度〉（第三章　近世）。

瀬川清子『十六島紀行・海女紀断片』（未来社、一九七六年、B六版・二六七頁）

三　留帳にあらわれた民俗。

美保関町誌編さん委員会編『美保関町誌』上巻（美保関町、一九八一年、A5版・一〇四五頁＋付録）

第四章　近世の美保関（第一節　近世の村浦〈はじめに、一　村と浦、二　村浦の行政、三　村浦の土地、四　水産業、六　村浦の社会〉、第二節　村浦の史話〈はじめに、二　美保関、三　外海の浦、四　内海の村〉、第三節　幕末維新と村浦）。

松江市東本町五丁目町内会編『雷電・御船屋・漁師町―松江市東本町五丁目町内会誌―』（松江市東本町五丁目町内会、一九八一年、A5・二〇九頁）

一、猟師と城下町、二、御用地の建物／御舟屋、御船奉行所と相撲場／、三、船玉稲荷神社／御船屋の守護神、船玉の信仰、棟札、船玉講／、四、漁師町／町の素描、松江渡海場／、五、御船屋の諸役

／御船奉行、諸役人、御水主、登米と廻米、隠岐巡検／、七、相撲と雷電／御水主と相撲、御水主と雲州力士／、八、維新と新産業／御水主の転業／（第二章　近世と近・現代）、五、漁／漁法／（第三章　町の暮らし）。

島根町誌編纂委員会編『島根町誌』本編（島根町教育委員会、一九八七年、A5版・八六九頁）

「一ノ楯」は大芦か水浦か、境目は赤平か猿渡島か、大芦と加賀の鰹立網をめぐって、桂島に鯨が寄ったぞ、寄り鯨さまおかげで遷宮。